

松井和夫君との思い出

松 本 久 雄

松井君は、私より一年後に大阪市大大学院経済学研究科の修士課程に入って来た。当時私は、新潟県に勤めている家内の扶養家族だったので、夏や春の長い休みには、一番先に新潟へ帰り一番遅れて大阪に戻るという生活だった。その年も春休みが終ってからしばらくして大阪へ戻ってみると、ふとんのシーツが少し乱れていて、同宿の友人の話で新入生歓迎会の二次会の流れで松井君が泊った跡とわかったのであった。その時はもちろん同君とは会ったこともなかったのだが、二人とも指導教官が同じ（名和統一教授）であったこともあって、その後学校では頻繁に顔を合わせる仲となった。彼は神戸大学の経営学部出身だったが、経済学——それもエコノミクスではなく、ポリティカル・エコノミー——を勉強したくて市大の大学院に進学したとのことであった。いつも笑顔を絶やさないで誰にも好感をもたれる都会的な彼と、山から出て来た熊かと想われていたらしい私との共通点は、どちらも大の酒好きということであった。修士課程を3年かかった私は、3年目には奨学金もなく経済的に大学院生活の続行が危うくなった時、家内が兵庫県に転勤となったことで救われて、何とか修士課程を修了したのだったが、2年間で修士課程を終った松井君とは博士課程では同期生となったのである。

だから、博士課程を満期退学となった時期は二人とも同じだが、私はそれ以前に生活のために大阪証券経済研究所（後の財団法人日本証券経済研究所大阪研究所）に入所しており、松井君は満期退学時に同研究所に入所して来たのだった。松井君には大学からの誘いもなかったわけではないが、「松本君が勤まっている所なら」というのが、同研究所への入所を選んだ理由だと本人は笑っていた。

その研究所には、私が入所した翌年の春に新潟時代の友人の落谷君を迎えており、松井君を加えた三人組は研究所の近くの中華料理店とか、淀屋橋の駅へ行く途中の飲み屋で毎日のように一杯やっていた。そして、松井君が北野田に居を構えるようになってからは、堺市の「しらさぎ団地」に居た私とは、南海電車の高野線を共に利用するので、研究所の帰りには難波駅近くの「治兵衛」で二次会をやるのが常となった。

松井君が研究所に入ってから7年後の1970年に私は桃山学院大学に移り、落谷君も1978年には桃山学院に移ったのだが、松井君は研究所を動こうとしなかった。しかし、桃山学院大学は当時は北野田にあり、松井君の住居に近かったので、時々は学校の帰りに同君の自宅に伺って、奥さんやお子さん達ともなじみになる機会は沢山あったのである。

その後さらに私は、1983年には金沢大学に移ったが、これは単身赴任で家族は大阪にいたので、時々研究所にも顔を出していたはずであり、そして、松井君が研究所を退職し

て、大阪経済大学へ移ったのもこの期間だったろうと思うのだが、明確な時期とその動機については全く記憶にないのが不思議である。

私は1996年に金沢大学を定年退職して新潟経営大学に移籍し、住居も大阪を引き払って新潟に移したのだが、北野田から富田林に移った松井君の住居にも何度かは伺っており、生まれたばかりの初孫も見せてもらっている。その頃彼は車椅子の生活で、大阪経大へもタクシーで通っているとのことであった。ところが3年ほど前からは麻痺状態が進んだとかで、大学も休職して病院生活を続けるようになり、こちらから見舞いに行くことも拒否されたままであった。その結果が本年（2004年）1月7日の訃報であり、それを私に伝えたのは落谷君であった。（ところが、その落谷君もこの7月2日に不帰の人となってしまった。）

松井君はアメリカ金融資本の実証的研究に生涯をかけており、その方面では高く評価されて出版された著書も数多かった。また、同じアメリカ金融資本の研究者である中央大学の呉天降氏とも親交があり、その縁で博士の学位は中央大学から授与されていた。

しかし彼は理論的な業績に対する理解力も勝れていて、私のこれまでの研究に対する最上の理解者であった。だから、私にとって一番残念なのは、昨年3月に出版した拙著『マルクス信用論の解明と展開』を、松井君に読んでもらえなかっただろうことである。今となっては、松井君の眠りの安からんことを祈るしかないのが無念である。